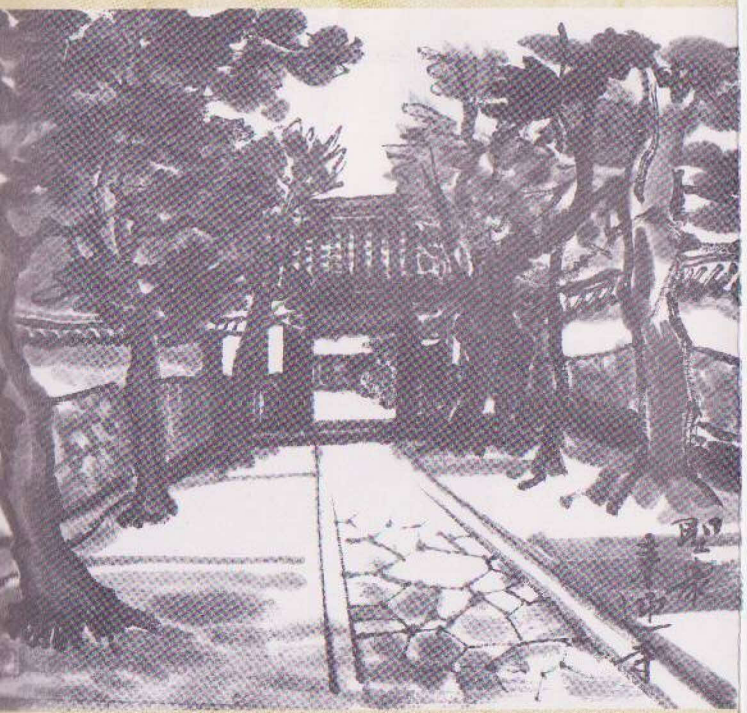
天台宗紫雲山

聖衆来迎寺



木造十一面観音立像

重要文化財／平安時代

客殿の須弥壇上に安置されている。一木造だが、背面から深く内刳を入れている。丸々とした顔に中央に集まる小ぶりの目鼻だちの観音立像である。

木造地蔵菩薩立像

重要文化財／鎌倉時代

作風は院派的特色が顕著にあらわれ、銅製透彫の挙身光背も当初のもので、周縁部に配された月輪内には、阿弥陀と地蔵の種子である「𑖪（キリーク）」と「𑖨（カ）」をあらわしている。

絹本著色六道絵

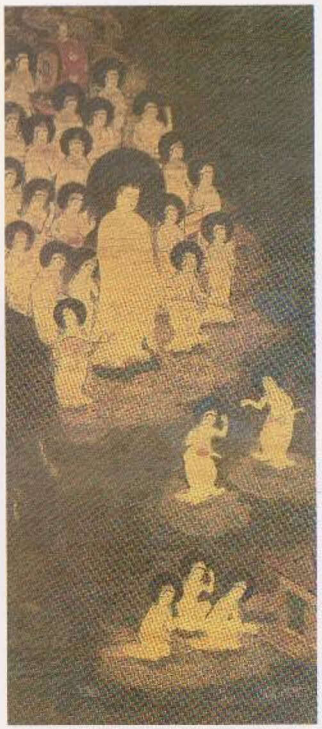
〔等活地獄殺生者罪科之図〕

国宝／鎌倉時代

六道とは、仏教の世界観からでたもので六つの迷いの世界、すなわち地獄、餓鬼・畜生、阿修羅、人間、天上界のことをいう。これに声聞、縁覚、菩薩、仏界の四つの悟りの世界を合わせて十界と呼び、昔から来迎寺の十界図といわれている。「往生要集」に説く厭離穢土の思想で、極楽浄土への往生を説いている。

絹本著色阿弥陀廿五菩薩来迎図

重要文化財／鎌倉時代



当寺では、この掛幅を絵本尊と称し恵心僧都の作として大切に伝えられてきた。阿弥陀如来と二十五菩薩が、往生者を極楽浄土へと迎える姿を描く。先頭を行く観音・勢至の両菩薩は、既に往生者の屋敷に達し、阿弥陀如来の手から放たれた三筋の光も、往生者のもとに届いている。

聖衆来迎寺由来略記

当寺は延暦九年（七九〇）、天台宗祖伝教大師により地蔵教院として建立され、長保三年（一〇〇一）比叡山横川恵心院の先徳源心和尚（恵心僧都）が、この地において水想観を凝らし紫雲の中に弥陀聖衆の来迎を感見され、当寺を紫雲山聖衆来迎寺と称し念佛弘通の道場の寺として開山したものである。

客殿は、寛永十八年（一六四一）頃の江戸初期の建物で、現在、国の重要文化財に指定されている。表門は、明智光秀の坂本城の旧城門として伝えられて、県の文化財に指定されている。また、書院の庭園は中国の洞庭湖を模して千菜寺宗心の桃山時代の作で、中央には大公秀吉が千菜寺から移植した大蘇鉄がある。境内には、岐阜中納言秀信公（織田信長公嫡孫）の母君の墓、織田氏の勇将森可成公（森蘭丸の父君）の墓等があり、何れも戦国の史蹟とする。

恵心僧都像（県指定文化財）

秋、紅葉に色づく本堂

■本　堂

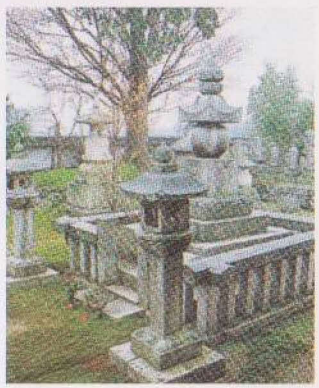
山門を潜り、右側にある特別高いのが本堂である。近世以後の新しい建築であるが、特に類例の殆どない向拝、廻縁の花崗岩で木造の形を模した石造である。また、内部の須弥壇上の中央に阿弥陀如来、向かって右に薬師如来、左に釈迦如来の三尊が本尊として安置されている。この三体本尊は、叡山において三千仏の仏名を唱えて一年間の罪を消滅し、来世の菩提を得るために行う「仏名会」の本尊であったといわれるものである。

客殿外観

客殿内部

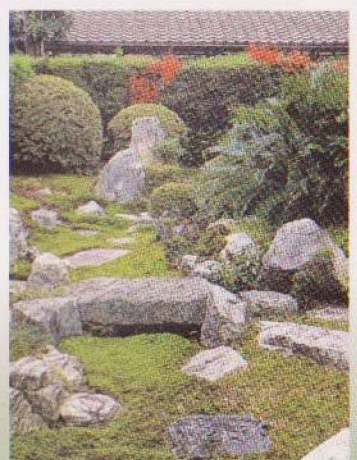
■客　殿〔重要文化財〕

東と南に広縁と落縁をつけ、南面入母屋、北面切妻、屋根柿葺の書院造りである。内部は二列四行の八室があり、内部の襖絵・貼付絵は当時江戸幕府の御用奥絵師として最も名声を博していた狩野探幽を頂点とした狩野派のそうそうたる画家によって描かれている。



■森　可成の墓

瑞垣に囲まれたなかに三段の基壇に大きな五輪塔といった立派な墓である。森三左衛門可成（一五二三―七〇）は、織田信長に仕え、美濃金山城主でもあった武将で、のちに宇佐山城主（大津市錦織町）になったが、坂本合戦で討死した。そのとき当寺の住持真雄が、当寺に葬った。その関係より江戸期にはいっても家臣たちが東海道往来のたびに当寺へ墓参に馳参じている。



■庭　園〔県指定文化財〕

この庭園は、豊臣秀吉の知遇を得ていた京都千菜寺の僧宗心の作による桃山時代初期様式の蓬莱枯山水で、一方からのながめだけでなく、四方に立って見ても優れた景観が鑑賞できる立華的手法にもとづいた庭園である。また、中央に植えられた蘇鉄は秀吉が千菜寺から移植したものと伝えられている。

表紙／山門（旧坂本城より移築）

ご案内

■拝　観：要予約にてお願いいたします。

■交　通：江若バス来迎寺前下車（JR琵琶湖線大津駅発25分）
JR湖西線比叡山坂本駅下車徒歩15分
湖西道路坂本北ICより車で5分

天台宗紫雲山
聖衆来迎寺
〒520-0104　滋賀県大津市比叡辻二丁目4-17
電話 077-578-0222

このリーフレットは再生紙を使用しています。